



AJEL

日本ラテンアメリカ学会

会 報

2003年11月1日



AJEL

No. 82

1. 理事会報告
2. 第25回定期大会開催について
3. FIEALC大会開催
4. 研究部会開催案内
5. 近著紹介
6. 出版物無料配布のお知らせ
7. 事務局から

1. 理事会報告

第104回理事会

日 時：2003年10月4日(土) 13:30~15:00

場 所：上智大学10号館415室

出席者：今井(理事長)、山田、後藤、乗、
二村、狐崎、堀坂

欠席者：松下(洋)、小泉、三田、小池、大
串

<報告事項>

- (1) 9月24日~27日に国立民族学博物館・大阪大学吹田キャンパスを会場に開催されたFIEALC日本大会について山田理事(実行委員長)より成功裏に終わった旨報告があった。合わせて次回大会(2005年)がローマで開催されることになったこと、およびアジア・オセアニア地域のラテンアメリカ研究機関地域機構CELAO(Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceania)の設立、同機構の会則、メルボルン大会(2005年)について報告があった。
- (2) 研究部会開催予定、会報、研究年報の出版および名簿作成について担当理事より報告があった。
- (3) 理事長より地域研究学会連絡協議会が15学会が参加の下、7月7日付けで発足したと報告があった。

<審議事項>

- (1) 2004年6月5、6日に同志社大学で開催予定の第25回定期大会実行委員長に松下マルタ会員を選出した。
- (2) 次期理事選出のための選挙管理委員会委員を理事選挙規則により以下のとおり選出し、理事長が各委員に委嘱することが決まった。
選挙管理委員長：幡谷則子、
選挙管理委員：鈴木茂、谷洋之、久野量一、
後藤雄介、柳原透各会員。
- (3) 学会ホームページおよびメイリングリストへの記事掲載希望が各種団体、企業から寄せられているのに鑑み、本学会の記事のほかは、関連学会、採用情報等会員に直接有益と思われる情報の掲載に限定し、営利団体の情報は掲載しないことを確認し、掲載の判断は担当理事に一任することとした。ホームページの作業量が増えているためアルバイトの雇用を了承した。
- (4) 入会者2名(小山朋子、上村淳志)を承認した。退会者8名(熊谷明子、国枝嘉弘、岡村順子、渡辺栄太郎、石川幸彦、松本幹雄、山田義雄、奥山智晴)。

2. 第25回定期大会開催について

第25回日本ラテンアメリカ学会定期大会は2003年6月5日(土)、6日(日)に同志社大学今出川キャンパスで開催いたします。大会の詳細は次号に掲載しますが、報告希望者は下記にご連絡下さい。

松下マルタ mahiroma@aol.com

3. FIEALC (ラテンアメリカ、カリブ海研究国際連盟) 第11回大会開催

9月24日より4日間にわたり国立民族学博物館と大阪大学吹田キャンパスを会場として、「グローバル化の経験と展望：ラテンアメリカ、カリブ海、アジアおよびオセアニア」をメインテーマとして開催されたFIEALC (ラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟) 第11回大会は、無事終了しました。世界の様々な国からの430名の登録参加者が集まり、約50の分科会でさまざまな発表が行われました。グローバル化に関する文科省の国際シンポジウムも大会の基調講演をかねて、同時開催されました。初日の開会式では、在日ラテンアメリカ・カリブ海外交団長(パナマ大使)や外部省中南米局佐藤悟参事官や連盟、実行委員会役員との挨拶と海上自衛隊舞鶴音楽隊の記念演奏があり、午後には「日本におけるラテンアメリカ音楽の受容」と題する大阪外大千葉和泉氏の講演と同氏の率いる楽団「ボセス・デル・スル」のすばらしい演奏もあり、組織委員長主催のレセプションでは、メキシコ大使の挨拶とマリimba演奏がおこなわれました。最終日の「日本文化の夕べ」では邦楽、日舞、合気道演舞なども披露されました。

学問的内容と行事全般についても、FIEALCの過去の大会を知る内外の参加者からお褒めの言葉をいただき、実行委員会でも、初めてのCDによる報告書刊行をはじめ、多くの点で、改善に努めたつもりだったので、一同嬉しく感じております。細部の改善を要する問題に関しては、いずれ皆様はじめ参加者からの意見が集まると思いますが、是非両論を分析、記録し、次の大会実行委員会に伝達し、一層の改善に資するつもりです。その意味で、連盟の発展と次回大会のため、忌憚のない御意見をお寄せください。

繰り返しになりますが、日本で私たちの学問分野としては、初めて開催された国際集會として、日本のラテンアメリカ・カリブ海地域研究に多大な刺激を与える効果があったとすれば、大会の目的はほぼ満たされたことに

なります。他方、海外からの参加者にとっても、日本や他のアジア諸国からの基調講演者、発表者との研究交流の機会となったとすれば、意味があったと思います。

なお、9月26日午前には、大阪大学コンベンション・センター講堂において、アジア・オセアニアのラテンアメリカ研究機関の地域機構 CELAO-Consejo de Estudios Latinoamericanos de Asia y Oceanía, 英語名 CLASAO-Council for Latin American Studies of Asia and Oceania の設立総会が開かれ、会則、次回大会地(メルボルン)、役員人事が決定されました。執行機関として、会長室 *Presidencia* が設けられ、会長山田睦男、副会長小泉潤二および Barry Carr (オーストラリア、ラトローブ大学ラテンアメリカ研究所長、次期大会実行委員長)、会計松下洋、監査今井圭子および西島章次、海外機関代表江時学(中国社会科学院美洲研究所次長)、金元鎬(韓国対外通商政策局企画部長)、Matthew O'Meagher (New Zealand Centre for Latin American Studies, センター長) によって構成され、次期大会まで会の運営にあたります。会長室は、地域研究企画交流センター内に置かれます。次期メルボルン大会や会則については、同センターのホームページ (www.minpaku.ac.jp/jcas/) および主要研究組織を通じて、いずれ公示されます。また、新規加入を望む方は山田 (yamadajc@idc.minpaku.ac.jp) まで御連絡下さい。

また、同日午後には、同じく阪大CC講堂において、FIEALCの役員総会が開かれ、慣例により、本大会実行委員長を務めた山田が第11代会長に選出されました。連盟事務局は、地域研究企画交流センターに置かれ、メキシコ国立自治大学の CCyDEL-Centro Coordinador y Difusor de Estudios Latinoamericanos に置かれている連盟運営委員会 *Coordinación General* と提携して、次期大会までの2年間連盟の運営にあたります。CELAO同様、地域研究企画交流センターのホームページのなかに、独自のシートを確保する予定です。次期大会は、2005年ローマで開かれ、実行委員長には、Istituto Italo-Latinoamericano の資料部長 Dr. Riccardo Campa が就任しまし

た。この詳細と今大会の報告書CDの予約方法なども、おって上記ホームページと大会ホームページ (www.pac.ne.jp/fiealc2003/) などに公示されます。

末筆ながら、学会の皆様のご協力を厚くお礼申し上げます。2005年のローマおよびメルボルン大会への積極的なご参加を期待いたします。

山田睦男

(実行委員長、地域研究企画交流センター)

4. 研究部会開催案内

《東日本部会》

日時：11月15日（土）午後2時～6時

場所：慶應義塾大学 三田キャンパス

124番教室

アクセスマップ：

<http://www.keio.ac.jp/access>

今回は中米をフィールドとする若手研究者の方々に発表をお願いしました。

報告者と報告課題

1. 藤井嘉祥（上智大学大学院）「雇用戦略の変化にみるマキラドーラの現状－グアテマラの事例より」
2. 村田真喜子（京都外国語大学大学院）「グアテマラ産の藍の重要性に関する一考察－世界市場におけるインディゴ・ブーム（1750－1810）を中心に－」
3. 茅根美保（お茶の水女子大大学院）「コスタリカ先住民ブリブリの呪医アワの現代的位相－霊的存在との関係から」

4. 木下雅夫（立教大学非常勤）「グローバル化とホンジュラスの小農民」

問い合わせ先：木谷（yhonya@giganet.net）

《中部日本部会》

日時：12月13日（土）午後2時～5時半

場所：南山大学L棟9階909（会議室）

報告者と報告課題

1. Rolando Requena Minami（名古屋大学大学院博士課程）「家族を通してみる在日ペルー人の生活」（La familia peruana en Japón, スペイン語で報告）
2. 田中敬一（愛知県立大学）『『バルン・カナン』再読－ポストコロニアルの視点から－』

問い合わせ先：

水戸博之（名古屋大学国際言語文化研究所）

Tel/Fax 052-789-4826

E-mail:k46240a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

田中敬一（愛知県立大学外国語学部）

Tel.0561-64-1111(ext.2604)

Fax.0561-64-1107

E-mail:keiichi@for.aichi-pu.ac.jp

《西日本部会》

日時：12月6日（土）1時半～5時

場所：神戸大学六甲台キャンパス、兼松記念館 1階 小会議室

報告者と報告課題

1. Jorge Chami Batista教授（リオデジャネイロ連邦大学経済研究所）「ラテンアメリカにおけるブラジル経済の役割」

*もう1名報告者を募集中

問い合わせ先：

松下洋（mahiroma@kobe-u.ac.jp）

——学会センターへの問い合わせ——

住所変更・異動の御連絡および会費納入に関するお問い合わせは直接、日本学会事務センターまでお願いします。

(脚)日本学会事務センター大阪事務所気付

日本ラテンアメリカ学会担当 中倉佳奈子

〒560-0082 豊中市新千里東町1-4-2

千里ライフサイエンスセンタービル14階

Tel. 06-6873-2301 Fax. 06-6873-2300

受付時間 9:30～5:30（土日休み）

12月20日より下記へ移転する予定です。

(新住所) 〒560-0082 豊中市新千里東町1-5-3 千里朝日阪急ビル13階

6. 近著紹介

安原毅著『メキシコ経済の金融不安定性』

新評論、2003年、302+xvページ

紹介者：久松佳彰（東洋大学国際地域学部）

本書は、基本的に新自由主義に対して批判的という筆者が、メキシコでは民営化や自由化といった制度改革がマクロ経済安定化政策との整合性を欠き、全体として種々の不均衡と矛盾をもたらしたことを理論的・実証的に示すことを目的とした著作である。本書は、メキシコ経済、発展途上国経済、金融経済に関心がある人ばかりではなく、グローバリゼーション化での中進国の制度変容のような国際政治経済に関心がある学徒にも一見そして一読をお勧めしたい。

本書の焦点は、銀行を中心とする金融部門とマクロ経済（特に金融政策）との連関である。本書の具体的内容は以下の通りである。第1章から第3章までは、それぞれメキシコ金融制度の歴史、金融システムの再編成、メキシコ中央銀行の実施した金融政策が詳細なデータと共に手際良くレビューされている。第4章と第5章では、筆者が拠って立つポスト・ケインジアン視角からの、貯蓄＝投資バランスそして貨幣供給の内生化及び金融不安定性理論が理論的に整理され、メキシコ経済に適用されるために修正されたモデルが解析的に提示されている。第6章から第9章までは、これまでの歴史・制度的なレビュー及び理論的な考察を踏まえたメキシコ金融経済への実証的な展開がなされている。具体的には、設備投資関数の実証（第6章）、内生的貨幣供給論及び金融不安定性の実証（第7章）、金融危機へのメキシコ当局の対応への批判的考察（第8章）、そして1990年代におけるメキシコの金融不安定性の原因に対する理論的評価（第9章）が行なわれている。

本書は、多様な関心を持つ学生・研究者に参照されることが適当であると思われる。例えば、発展途上国（中進国）経済に対して新古典派的でなくポスト・ケインジアン理論の応用に興味がある学徒には最新最適の手引き

書であると言えよう。より一般にメキシコ経済の制度・歴史に興味がある人にとっても本書は重要であろう。例えば、1970年代までのメキシコ・マクロ経済文献にはエンカへの効果を議論したものが多く、これを簡便に解説した邦語文献は筆者の知る限り無い。エンカへはしばしばメキシコ中央銀行の個別産業振興としてのミクロ的資金配分手段としてのみ評価されるが、本書はそのマクロ経済的側面を簡単に日本語で解説している。このように、一般的に発展途上国の金融に関心がある学徒にも、メキシコの豊富な実例が提供されているという意味で本書は興味深いであろう。発展途上国のマクロ経済研究者にとっては、仮にポスト・ケインジアン理論に馴染みの無い人でも、多くのデータが図表の形で示され、筆者の検討の足跡を辿ることができる。

本書は、その専門的特徴から主として経済（学）に関心がある人に読まれることを目的としているといえよう。しかし、国際政治経済におけるメキシコのような中進国のあり方を考える上でも示唆に富む事実が記述されている。例えば、BIS規制とメキシコの銀行行政の関わりなどはグローバリゼーションの中での国内制度の変容の一例としてそれ自体興味深い。さらには、各章の先頭頁を飾る図版は、筆者が収集したのであろう興味深いメキシコ紙幣や硬貨の写真、メキシコ市の金融中心の写真などが掲載されていて、本書に筆者がこめた思いの深さを感じることができる。蛇足であるが、本書を通読してのいなものねだりを記せば、バーナンケらが提示する金融政策のクレジット・ビューを筆者がどのように評価するかを紹介者は知りたくなった。

まとめるならば、本書は一貫した理論的視覚から制度・歴史・理論のレビューを踏まえた現代のメキシコ・マクロ経済（特に金融面）に関する実証の著である。

堀坂浩太郎、細野昭雄、古田島秀輔『ラテンアメリカ多国籍企業論
——変革と脱民族化の試練』日本評論社、2002年、xii+296ページ。
紹介者：谷 洋之（上智大学）

経済のグローバル化とそれに応じた対外自由化・国内規制緩和は、世界規模でわれわれの生活を変容させつつある。周知のようにラテンアメリカ地域にあっては、その流れはより急速かつ劇的なものであった。本書は、同じ著者らが特に民族企業の国際展開を活写した『ラテンアメリカ企業論』（1996年）、「官」から「民」への先駆的な過程を描出した『ラテンアメリカ民営化論』（1998年）の続編として、この地域の経済における一大地殻変動の模様を、今度は域外からの直接投資を主軸に捉えようとしたものである。かつては「国家主権への脅威」であるとともに「輸入代替工業化推進の不可欠の手段」でもあるというアンビバレントな存在と認識された多国籍企業が、1980年代以降の経済構造の激変の中でどのように捉え直されてきたのか、そして域外の多国籍企業がラ米諸国の経済変動にさらなる動因をいかに与えてきたのかを把握するのにきわめて有用な書である。

本書の構成は実に立体的である。まず第1章「ラテンアメリカにおける外国直接投資と多国籍企業の役割」で、地域全体の、特に1990年代以降の趨勢と特質を、主にCEPALのデータおよび類型化枠組みに依拠しつつ概観した後、具体的な諸事例を、第I部で主要投資国別に（スペイン、米国、ドイツ：第2～4章）、第II部で主要産業別に（自動車、鉱業、小売業、エネルギー：第5～8章）、第III部で主要受入国別に（チリ、メキシコ、ブラジル、アルゼンチン：第9～12章）、多面的に紹介している。個別事例についてここで触れる余裕はないが、第I部でスペイン・米国企業が扱われることで金融、通信等の分野が、第II部で小売業が扱われることでフランス企業等がそれぞれカバーされているように、表題以上の内容が盛り込まれていることを併せて記しておきたい。そして最終第13章「多国籍企業論：三つの視角から」では、以

上の議論を要約した上で、企業については、世界大の戦略的なネットワーク形成を睨みつつも「ラテンアメリカの企業社会を広く深く研究」（278頁）した上で投資の決断を行なっている点を、また受入国については、①企業の定着に向けた環境整備、②レギュレータ機能の一層の強化、③多国籍企業現地法人への地場証券市場上場要請の3点が必要である点を、それぞれ指摘して本書全体を締め括っている。

このように本書は、投資側・受入側双方にとっての「教訓」を多様な事例から引き出そうとしていることから、対象読者を研究者のみならず、広く日本の、特に企業社会と想定しているようである。なかでも、進出企業が受入国の「企業社会を広く深く研究」している点の指摘は、目先の経費節減に汲々とする昨今の日本企業（大学・研究機関も？）への警鐘とも受け取れよう。また、ラ米諸国の投資受入国としての豊富な経験は、同様に企業社会のグローバル化という「変化から自由ではられない」（282頁）日本社会にとって参考になる点が少なくない。他方、研究者にとっては、さらなる事例の蓄積や追跡・検証は勿論のこと、こうしたミクロ的基盤に立つ研究成果をマクロ的・社会的な視野の下に置き直すという課題が与えられたといえるだろう。ラ米地域における企業活動の動態はきわめて興味深いのが、それは1980年代に先立つ数十年間に企業や国家が不十分ながら飼いつつあった諸問題を徹底的に再「野生化」することで達成されたという側面もあるからだ。

それ以外にも、ラ米とスペインの経済関係や米国での粉飾決算事件以降、関心が高まりつつある株式会社制度の在り方など、本書はさまざまな興味をかき立ててくれる。日本社会へは情報とヒントを、同業者には刺激を与えてくれる好著である。

林みどり著『接触と領有—ラテンアメリカにおける言説の政治』

未来社、2001年、206+xiページ

紹介者：齋藤 晃（国立民族学博物館）

本書は、文学批評・思想史の分野における日本語によるポストコロニアル研究として、近年最良の成果のひとつである。

本書の目的は、19世紀アルゼンチンの植民地主義的言説を対象に、「支配的言説に書きこまれた被支配層の文化的あらわれが、言説レヴェルにおいてもたらず抗争的側面を解析する」(11) ことである。歴史に関心を持つ者にとって、書かれた記録は過去を知るための貴重な手がかりだが、「そうした記録とは、生きのこった勝者たちが、死んでしまった者たちの語りを篡奪し利用したり、忘却したり隠蔽するものである」(18)。それゆえ、敗者について知るためには、「テキストが周到に排除し見せないでおこうとしているものにまで読みを拡大」(20) し、いわばテキストの口をむりやり割らせる必要がある。著者がその技法を心得、それを駆使して見事な成果を上げていることに疑いの余地はない。

著者は、歴史書や小説、旅行記を精密かつ大胆に読み込み、見落とされがちな細部に着目し、テキストの一見なめらかな生地に潜む亀裂や葛藤を明るみに出していく。専門外の読者を萎縮させるポスト構造主義のジャーゴンも、著者の手にかかると、意味明瞭かつ操作性抜群の分析道具に早変わりする。先鋭な、ときには先鋭すぎるほどの問題意識をもって高度に抽象的な議論を展開するとともに、個別のテキストの具体的相貌へも肉薄していく。

注目すべきは、本書が「被支配層の抵抗の行為実践それじたい」(11) ではなく、支配的言説の内部におけるその痕跡に関心を集中していることである。著者はその鋭敏な感覚により支配者の勝利宣言にいまじる「奇妙な雑音や音とび」を聴きつける。しかし、それらの雑音が「被支配層の文化」という実像へ収斂することは決してない。分析の焦点は支配的言説の彼方に向かわず、その手前にとどまる。ただし、その言説自体は、もはや継

ぎ目のない均質な一枚布ではなく、「グランジ」、すなわち「みすぼらしく擦りきれたり色が剥げおちた不格好なありさま」(148) で白日のもとにさらされるのである。

あくまで言説レヴェルにとどまろうとする著者の姿勢は、戦略的なものである。著者は、「被支配層の文化」を実体として言説化することが、支配的言説の抑圧行為を反復することになると懸念する。実際、言説化することは中立的な行為ではない。それは、恣意的な基準で対象を切り取り、分類し、命名し、その内実を固定する。言説化は対象への暴力として働き、その秩序に収まらない「法外なもの」を抑圧する。敗者の声を忘却の淵から救い出し、書きとめる試みも、例外ではない。それゆえ著者は、実体論的再構成を退け、支配的言説の亀裂のうちに被支配層の痕跡を、当事者不在のまま確認するにとどまる。

紹介者はこの点で著者と立場を異にする者である。異文化接触を「徹底して言説の問題として」(10) 扱うことで、著者は見事な成果を上げはしたが、大きな代償を払いもした。個別のテキスト内部の「言説の政治」は、テキストがその一部であったはずのより幅広い「政治」と明確に関連づけられることなく、その「代補」として機能する。しかし、代替された実体のほうは、「フロイト的な意味における不気味なものとして」(88) 帰還し、著者の言説の内部に巣くっている。実体は「あったかもしれない。いや、おそらくあったにちがいない。けれども…」(174)。

もっとも、この点は本書の価値を下げるものではない。むしろ、その逆である。なぜなら著者は、支配的言説の内側からの批判を貫き通すことで、言説がもはや言説としての同一性を維持できない臨界点を見きわめることに成功しているのだから。支配的言説を脱構築し、「グランジ」化した著者が、今後どこへ向かおうとするのか、注目していきたい。

6. 地域研究企画交流センター出版物無料配布のお知らせ

次の刊行物を本体および郵送料無料で送りますので、ご希望のかたは、年度と書名を明記の上、お申し込み願います。

- 2003 YAMADA Mutsuo, org. *Emigración latinoamericana: Comparación interregional entre América del Norte, Europa y Japón*. Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, 590p.
- 2002 YAMADA Mutsuo, Carlos Iván Degregori orgs. *Estados nacionales, etnicidad y democracia en América Latina*. Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, 380p.
- 1999 MIYAJIMA Takashi, KAJITA Takamichi, YAMADA Mutsuo, eds. *Regionalism and Immigration in the Context of European Integration*. Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, 313p.
- 1997 YAMADA Mutsuo, org. *Ciudad y campo en América Latina*. Osaka: The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, 334p.

申込先：565-8511

吹田市千里万博公園10-1
国立民族学博物館 地域研究
企画交流センター事務室

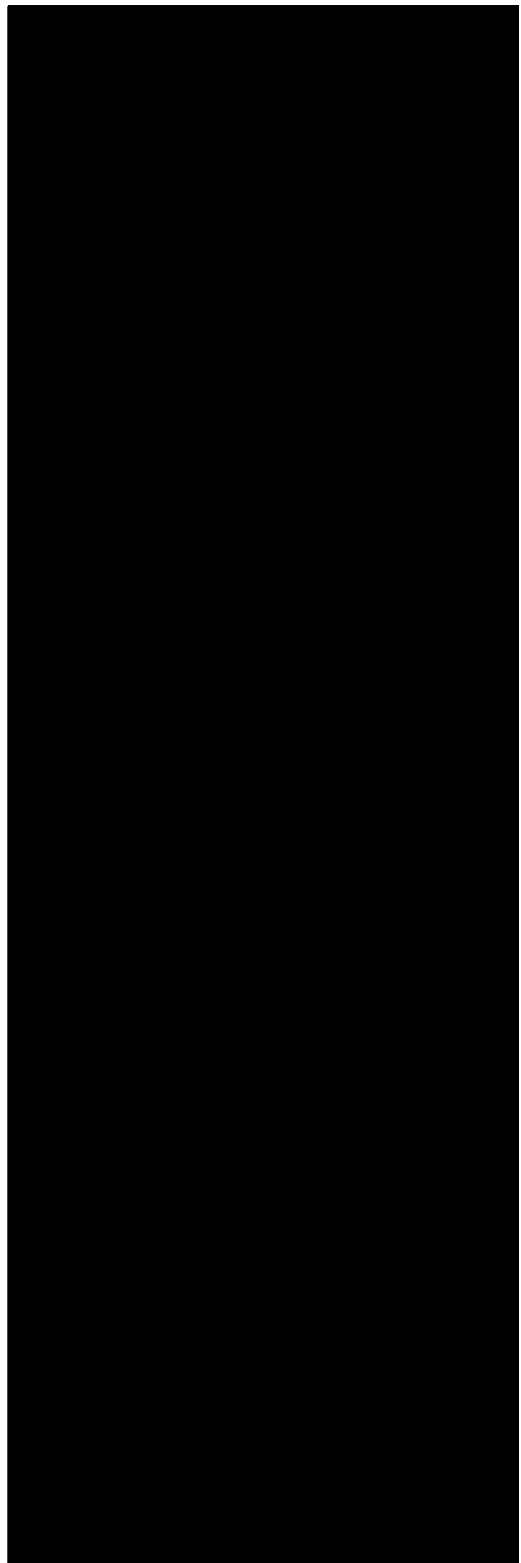
F a x : 06-6878-8353

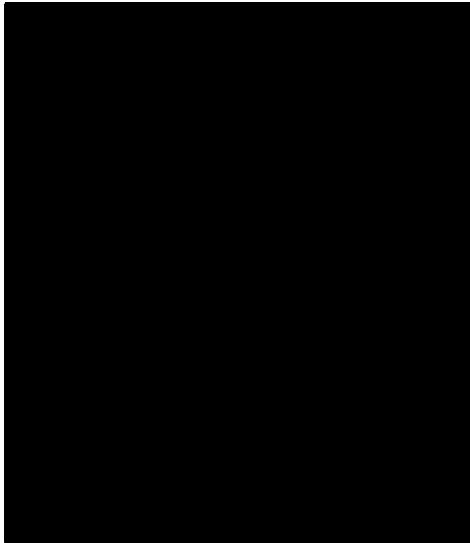
電 話 : 06-6878-8343

メ イ ル : jss@idc.minpaku.ac.jp

7. 事務局から

I. 会員関係 (a b c 順) (敬称略)





訃報 当学会のために一方ならぬ御尽力を賜ったお二人の会員が逝去なさいました。

松本幹雄会員 2003年5月2日

石川幸彦会員 2003年7月28日

ここに謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈り致します。

II. 寄贈図書

- 笛田千容『メキシコの「新しい農民運動」に関する一考察—自治農民地域組織全国連合 (UNORCA) の形成と発展—』上智大学イベロアメリカ研究所、2003年
- 武田和久『ラプラタ地域におけるイエズス会レドゥクシオンのグアラニー戦士』上智大学イベロアメリカ研究所、2003年
- 浅香幸枝「トランスナショナル・エスニティー拡散する日系人の134年の歴史 (1868年-2001年)」『アカデミア』(南山大学) 人文・社会科学編 第73号 2001年
- 浅香幸枝「スペイン語文化圏の運命と予言の民話に見る世界観」『アカデミア』(南山大学) 人文・社会科学編 第74号 2002年
- 国本伊代「ベリーズにおけるメノナイト信徒集団—キリスト教再洗礼派が熱帯低地に求めた新天地の建設と変貌」『中央大学論集』第24号 2003年

- *Estudios Latinoamericanos*, 2, 3, 4, 5, 6 (2002), 1 (2003), Institute of Latin American Studies, Chinese Academy of Social Sciences.
- Black, Chad T., *The Making of an Indigenous Movement: Culture Ethnicity, and Post-Marxist Social Praxis in Ecuador* (Research Paper Series No. 32) Albuquerque, Latin American Institute, Univ. of New Mexico, May 1999.
- Howe, Alyssa Cymene, *Nicaraguan Gay and Lesbian Rights and the Sex of Post-Sandinismo* (Research Paper Series No. 33) Albuquerque, Latin American Institute, Univ. of New Mexico, May 1999.
- Medrano, Feliza, *'Ni chicha ni limonada' Depictions of the Mulatto Woman in Cuban Tobacco Art* (Research Paper Series No. 34) Albuquerque, Latin American Institute, Univ. of New Mexico, May 1999.

編集後記

WTO (世界貿易機構) メキシコ会議の決裂、日本とメキシコの自由貿易協定の不成立、そしてポリビアの政変など、グローバル化をめぐる南北のひずみに、研究者の姿勢が問われてくるように思われます。

(乗 浩子)

No.82

2003年11月1日発行

学会事務局

〒102-8554

東京都千代田区紀尾井町7-1

上智大学イベロアメリカ研究所

日本ラテンアメリカ学会事務局

TEL 03-3238-3530・3535

FAX 03-3238-3229

E-mail: m-matsu@sophia.ac.jp

事務担当理事: 堀坂浩太郎

秘書: 松丸美佐子